

ディベートで考えるサマータイム制

1. はじめに

ディベートを通して、環境政策の実施によるメリットとデメリットが明らかになる中で、それらを比較し、よりメリットの大きい環境施策について考えようとする学習が期待される。また、ディベートは、しなやかな頭脳と練りあげられた議論の競い合いが醍醐味であるが、環境問題については議論に重点をおくのではなく、現状を客観的に認識しながら、地球市民として持続可能な社会をどのように造り上げていくかという視点が大切である。そのため判定はおこなわない。

2. サマータイムについて

サマータイムとは、夏の日の長い期間に、時計を1時間進めて昼の時間を長くする制度である。欧米を中心に世界の約80ヶ国で実施されている。長くなった時間で余暇を楽しむことができ、照明や冷房の省エネルギー対策としても期待されている。

この制度を導入することによって、直接効果としては、夕方の明るい時間が1時間長くなることによる照明需要の節約の効果が大きくなる。(実際には、午前中の気温が低くなることにより、日中の使用が中心である業務用冷房については省エネとなるが、家庭用冷房については午前中の省エネ効果を上回る夕方の増エネ効果があるため全体としては若干増エネとなる。しかし、与える効果を合計してみると、国全体としては省エネとなり、温室効果ガスの削減効果が認められる。)

間接効果については、2通りの効果が考えられる。まず第一に、制度導入により一人一人が「地球環境にやさしいライフスタイル」を実現するという意識改革に効果があると考えられている。第二に、導入によって明るい夕方の時間が長くなり、副次的な効果として、ショッピング等の余暇活動の増大が予想されることから、これらの活動に伴う増エネルギー効果の発生が考えられる。

3. 授業の展開

学習活動	学習指導
1. 論題とディベートの進め方について説明を聞く。	<ul style="list-style-type: none">・サマータイム制を導入することで、省エネを考える。論題のような主張があり、その是非を討論するという目的を明確にする。・賛成側・反対側の二つのグループに分ける。
2. 賛成側・反対側の意見を読み、そこにおける論議をとらえる。	<ul style="list-style-type: none">・ディベートの進め方を説明する。・ワークシートの意見発表を読ませ、それぞれにおける論議を図示的に板書する。
3. それぞれの立場で、第1反論の準備・発表をおこなう。	<ul style="list-style-type: none">・反論は、相手の議論における理由の部分を否定しなければならないことを知らせ、ワークシートに記入させる。・反対側、賛成側の順に複数発表させる。その中で、すぐれた反論を選択させて、その内容を模式的に板書する。
4. それぞれの立場で、第2反論を準備・発表をおこなう。	<ul style="list-style-type: none">・第2反論は相手の第1反論への反論であり、相手の反論によって否定された部分の回復であることを知らせる。・発表された反論は、第1反論と同じように取り扱う。
5. まとめ	<ul style="list-style-type: none">・自分の考えをワークシートに書く。判定はしない。

☆参考文献

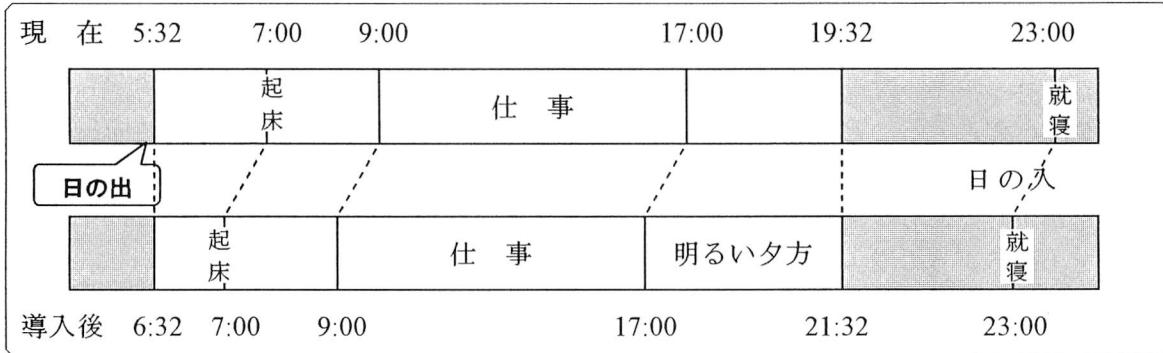
- ・ディベートによる社会科の授業づくり（明治図書）
- ・サマータイム制度に関する調査報告書（国民会議報告）

ワークシート①

1. 論題 「日本はサマータイム制を導入するべきである」

2. 定義

サマータイム制とは、日照時間が長くなる夏の一定期間、時刻を標準よりも1時間すすめ、昼間の日照時間を有効に活用する制度である。欧米では、デイライト・セイビング・タイム (Daylight Saving Time) と呼ばれ、多くの国々で実施されている。



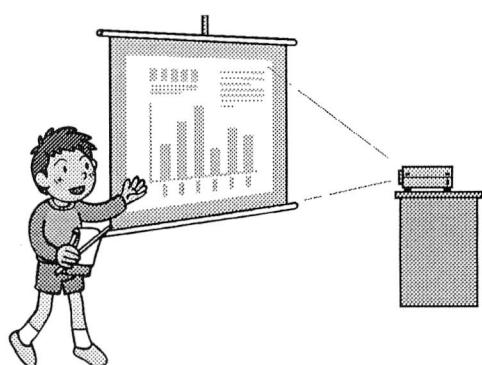
サマータイム制度による時刻の変更

3. プラン

- ① サマータイム制を導入する法律を制定する。
- ② 實施期間は4月1日から9月30日までとする。
- ③ 3月31日を23時間として、4月1日より1時間すすめ、9月30日を25時間として、10月1日より標準時に戻す。
- ④ 時刻を進めたり戻したりすることに関わる費用は、政府、地方公共団体、企業、個人などがそれぞれ負担する。

4. 進め方

- ① 賛成派の立論 (5分)
- ② 反対派の立論 (5分)
——作戦タイム (2分) ——
- ③ 賛成派の反論 (3分)
- ④ 反対派の反論 (3分)
——作戦タイム (2分) ——
- ⑤ 反対派のまとめ (3分)
- ⑥ 賛成派のまとめ (3分)
- ⑦ 判定者の質問 (5分)
- ⑨ 活動全体のまとめ



賛成立論

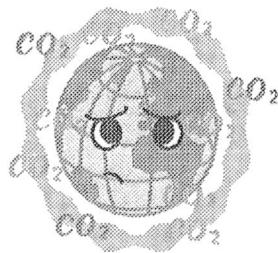
論題「日本はサマータイム制を導入するべきである」に賛成します。

サマータイム制を導入すると、メリットが発生します。

それは、二酸化炭素の排出量の減少です。

理由を言います。

サマータイム制が導入されると、時刻が1時間繰り上がり、夕方の明るい時間が1時間増えます。そうなると、午前中の気温が低くなること等に伴う冷房需要等への影響があり、日中の使用を中心である業務用冷房については省エネとなります。家庭用冷房についてみると午前中の省エネ効果を上回る夕方の増エネ効果があるため若干増エネとなりますが、全体としては電力が節約できます。証拠資料として省エネルギーセンター『サマータイム制度に関する調査報告書』1994年、27ページから引用すると、「サマータイムの時間移行に伴う影響（1次的影響）は、55万kl（石油換算）」、「また、平成4年度、最終エネルギー消費の0.15%に相当。」（引用終了）となります。資料にあるように原油換算55万klものエネルギー節約ができます。エネルギーの使用は、二酸化炭素の排出をともなうものです。したがって、エネルギーを節約すれば、二酸化炭素の排出量を減らすことができます。



また、二酸化炭素の排出は地球温暖化に大きく寄与するものです。したがって、二酸化炭素の排出を減らすことは、地球温暖化の防止につながるという重要なことです。

このようなメリットがあるので、サマータイム制導入に賛成します。

反対立論

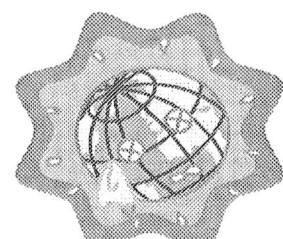
論題「日本はサマータイム制を導入するべきである」に反対します。

サマータイム制を導入すると、デメリットが発生します。

それは、時刻切り替えの費用が必要となることです。

理由を言います。

サマータイム制を導入するには、時刻の切り替えをしなければなりません。もちろん、信号機以外にも切り替えを必要とするものは、非常に多くあります。すると、その切り替えの時に日本中の時計やコンピュータ、信号機などのプログラムを変更



しなければなりません。そうなると、そのための作業が必要になります。その作業には、費用が必要となります。証拠資料として、1995年6月7日付の日本経済新聞を引用します。「警視庁は、信号機などのプログラム変更に481億円も必要なため、（サマータイム制が）実施されたら『経費を別枠で予算化してくれるのだろうか』とヤキモキしている。」（引用終了）

今、日本は財政赤字に苦しんでいるのです。それにもかかわらず、さらにサマータイム制を実施すれば、多大な経費を支出することになります。その支出は、日本の財政赤字を大きくしていくという深刻な問題となります。

このようなデメリットがあるので、サマータイム制導入に反対します。

ワークシート③

反対側反論1

賛成側立論に反論します。

賛成側反論2

反対側反論1に反論します。



賛成側反論1

反対側立論に反論します。

反対側反論2

賛成側反論1に反論します。



自分の考え方